

Title	知と真：アウグスティヌス『教師論』における
Sub Title	Knowledge and truth in Augustine's De magistro
Author	中川, 純男(Nakagawa, Sumio)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1996
Jtitle	哲學 No.100 (1996. 3) ,p.21- 41
JaLC DOI	
Abstract	In his dialogue 'De magistro', Augustine states a famous thesis: we get knowledge not from any human teacher, but from consulting the truth inhabiting in our inner man. Augustine's concept of this inner truth, however, seems to change in the course of the dialogue. When Augustine first introduces the idea of inner truth, he compares it to light and says "Concerning color and other things we consult light, the elements of this world, those bodies which we sense, and the senses themselves (12,39)". What he means here is that when we get sense perception, we are also aware whether this perception is true or false, that is whether it is of real things (res) or of false images. In this sense, the truth is something by which we are convinced that our knowledge is true. Augustine had acquired this concept of truth through the refutation against the Sceptics. But at the end of the dialogue, Augustine says, "pupils, looking to that inner truth, consider within themselves whether teachers say true or not. (14,45)" Here the truth is something by which we can judge whether what has been said is true or false. This transition can be explained as follows. Augustine from the beginning does not regard the certainty of knowledge as wholly objective. "We consult", he says, "the truth according to the capacity of each one." He is well aware of the limit of our capacity. It was this awareness that prompted Augustine to change his notion of the truth.
Notes	100集記念号
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000100-0021

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

知と真

アウグスティヌス『教師論』における

— 中 川 純 男* —

Knowledge and Truth in Augustine's *De magistro*

Sumio Nakagawa

In his dialogue '*De magistro*', Augustine states a famous thesis: we get knowledge not from any human teacher, but from consulting the truth inhabiting in our inner man. Augustine's concept of this inner truth, however, seems to change in the course of the dialogue. When Augustine first introduces the idea of inner truth, he compares it to light and says "Concerning color and other things we consult light, the elements of this world, those bodies which we sense, and the senses themselves (12,39)". What he means here is that when we get sense perception, we are also aware whether this perception is true or false, that is whether it is of real things (*res*) or of false images. In this sense, the truth is something by which we are convinced that our knowledge is true. Augustine had acquired this concept of truth through the refutation against the Sceptics. But at the end of the dialogue, Augustine says, "pupils, looking to that inner truth, consider within themselves whether teachers say true or not. (14,45)" Here the truth is something by which we can judge whether what has been said is true or false. This transition can be explained as follows. Augustine from the beginning does not regard the certainty of knowledge as wholly objective. "We consult", he says, "the truth according to the capacity of each one." He is well aware of the limit of our capacity. It was this awareness that prompted Augustine to change his notion of the truth.

* 慶應義塾大学文学部教授 (哲学)

I

アウグスティヌスの『教師論』は息子アデオダトゥスとの対話を収めた書物である。その内容について、晩年の『再考録』では次のように言われている。

「あなたがたの教師はキリストのみである」と福音書に書かれている通り、人間に知識を教える教師は神以外にはないということが論じられ、探求され、見いだされた。⁽¹⁾

『再考録』によれば、『教師論』は「人間に知識を教える教師は神以外にはない」ことを明らかにした書である。ほぼ同じ評価は『教師論』の最後46節でも語られている。そこに至るまでの対話を振り返り、アウグスティヌスはアデオダトゥスに向かって言う。

今わたしがあなたに勧めたのは、認めるべき以上の役割をことばに与えないようにということでした。それができれば、わたしたちは神を語り手とすることば、地上の誰かをわたしたちの教師と言ってはならない、すべての人の唯一の教師は天におられるのだから、と書かれていることがいかに真実であるかを信じるだけでなく、理解し始めているのです。⁽²⁾

『教師論』の内容に関するアウグスティヌス自身の評価は一貫している。対話の目的は「あなたがたの教師はキリストのみである」という聖書のことばの真実性を理解することであった。「探求され、見いだされた」と語るアウグスティヌスがこの目的は達成されたと確信していたことは明らかである。しかしながら、本書の内容を見るとき、このアウグスティヌスの

確信は、われわれをただちに説得するものではないように思われる。『教師論』に記された対話をたどるかぎり、「神のみが教師である」と結論するアウグスティヌスの論理には飛躍があるように思われるからである。本論文において、われわれはまず、「神のみが教師である」と導くアウグスティヌスの論理を正確に理解し、次いでこの主張がアウグスティヌスにとってどのような意味を持っていたのかを明らかにしよう。

II

ここで問題とされている聖書のことばについて、アウグスティヌスがどのような理解を前提に解釈しようとしているのかを予め確認しておかなければならない。『再考録』における引用「あなたがたの教師はキリストのみである」は『マタイ福音書』23章10節のことばである。これに対し、『教師論』46節では、その直前の9節「あなたがたの唯一の父は天にいます方である」が、念頭におかれている。『マタイ福音書』において、この二つの箇所が全く同じ内容であるかは疑問である。しかし、『再考録』で引用された聖書のことばは「人間に知識を教える教師は神以外にはない」と言い換えられており、『教師論』の中で「すべての人の唯一の教師は神である」にあたる内容が最初に表明された箇所では「内に住むと言われるキリスト」と言われているから⁽³⁾、アウグスティヌスは『教師論』の主題に関する限り神とキリストを区別していないと見なすことができる。さらに重要な点は、この「神が教える」あるいは「キリストが教える」という表現は「真理が教える」と言い換えられており、この言い換えがアウグスティヌスの言う聖書のことばの「理解」を可能にしているということである。すなわちアウグスティヌスが、その真実性を確認し「理解」しようとしていることばは、直接的には「あなたがたの教師はキリストのみである」という聖書のことばではなく、その解釈としての「真理のみが教えることができる」という主張である。

アウグスティヌスは「神のみが教師である」ということばの真実を、どのような根拠によって確認しようと考えているのか。アウグスティヌス自身の意図をまず見届けておくことにしよう。先に引用した『教師論』46節には、「認めるべきである以上の役割をことばに与えない」ならば、「神のみが教師である」ことを明らかにすることができると言われていた。ことばの限界を明らかにすれば、教師は神のみであることが明らかになるとアウグスティヌスは考えている。このことは、『教師論』の全体の構成によっても裏付けられる。本書の構成は、そのつどの対話の主題により次のように整理することができる。

	章, 節
序 何のために話すのか.	1, 1-1, 2
1 しるしなしには何も教えられない.	2, 3-10, 31
2 しるしによっては何も教えられない.	10, 32-10, 35
3 教えるのは内なるキリストのみである.	11, 36-14, 46 ⁽⁴⁾

ここに言われる「しるし」は、『教師論』の文脈においては、主として「ことば」のことであると理解しても差し支えない。1の「しるしなしには何も教えられない」という主張は2の「しるしによっては何も教えられない」という論とは正反対であるように思われるが、これは「ことば」の機能について、アデオダトゥスの理解を試すための戦略的な論であると見なすことができる⁽⁵⁾。また、序「何のために話すのか」は、教えることと話すこととの関係、すなわち教えることとことばを使うこととの関係の確認であり、以後の対話の主題を設定するための問いであると考えられる。したがって序および1の部分も、2の「ことばによっては何も教えられない」という同意を確立するための準備であると思なすことができる。とすれば、『教師論』は結局、次の二つの主題から構成されていることに

なる。

- I ことばによっては何も教えられない。
- II 教えるのは内なるキリストのみである。

これは、46節のことばに見られた、アウグスティヌス自身の要約と一致する。46節に言われていた「ことばに認めるべき以上の役割を与えない」とは、「ことばによっては何も教えられない」ことを明らかにすることであったと考えられるからである。ことばに認めるべき以上の役割を与えないなら、「唯一の教師は神である」という聖書のことばを理解し始めているのであると言うアウグスティヌスが、Iの同意からIIの同意が導かれると考えていることは明らかである。しかし、どのような推論によってIの同意からIIの立場が帰結するのであろうか。

「ことばによっては何も教えられない」という主張を、「人間の教師はことばによって何も教えることができない」という意味に解することは許されるであろう⁽⁶⁾。なぜなら、「ことば」は『教師論』においては、もっぱら音声としてのことばとして理解されており、神に祈るときに「ことば」は必要ないと言われているからである⁽⁷⁾。「ことばによって教える」のは人間の教師に固有の教え方であると見なすことができる。しかしながら、「ことばによっては何も教えられない」という主張をこのように解釈したとしても、やはりこの主張から「教えるのは内なるキリストのみである」と導くことはできない。なぜなら、第一に「人間の教師はことばによって何も教えることができない」という命題は、人間の教師がことばによらず教える可能性を排除していないし、第二に、かりに人間の教師は教えることのできないことが無条件に認められたとしても、だからといって神が教えることにはならないからである。

III

まず第一の問題から考えてみよう。「ことばによって教えることはできない」と主張するアウグスティヌスは、教えることを無条件に退けているのではないように見える。しるしによって学ばれることは何もないという主張を説明して、アウグスティヌスは言う。

どうでしょう、注意して考えてみるなら、それ自身のしるしによって学ばれることは何一つないことが分かるのではないのでしょうか。というのは、しるしを与えられたとき、わたしがどのような「ことがら」のしるしか知らなければ、そのしるしは何も教えることができないし、わたしが知っていたなら、しるしによって何を学ぶことがあるのでしょうか。じっさい、ことばがその表示する「ことがら」を見せることはないのです。⁽⁸⁾

「しるしによって学ばれることは何一つない」ことを説明しようとするこのアウグスティヌスの論は、論証の形式をとっているが実はすでに前提として認められている「しるし」と「ことがら」resとの関係を再確認しているに過ぎないように思われる。「しるし」がどのような「ことがら」を表示する「しるし」か知らなければ、その「しるし」は何も教えることができない、と言われているからである。「しるし」は「ことがら」を表示している。「ことがら」について知ることが学ぶことである。ところが「しるし」は、「ことがら」についての知を与えない。このようにアウグスティヌスは主張している。「しるし」signumが何らかの「ことがら」を表示している significare ということはアウグスティヌスも認めている⁽⁹⁾。しかし「しるし」を「しるし」と認めることが「ことがら」を知ることであるとは考えていない。アウグスティヌスの言う「ことがら」は、「しる

し」の相関者ではなく、知の相関者である。知は「しるし」を介することなく「ことがら」について成立する。それゆえ、「ことばがその表示する「ことがら」を見せることはない」と言われるのである。

したがって、われわれは次のように言わなければならない。「ことばによっては何も教えることができない」という主張は、アウグスティヌスにとって、「教えることが不可能である」という主旨の主張ではない。教えるのは「しるしを与える」のとは別の仕方、すなわち「ことがらを見せることによる」という主旨の主張である。とすれば、「ことばによっては何も教えることができない」という主張が、人間の教師は何も教えることができないという結論を導かないことは明らかである。むしろ、ことばによらず「ことがら」によって教える可能性を積極的に認めた発言であると解釈しなくてはならない。じじつ、アウグスティヌスもこの意味での教えるの可能性を積極的に認めているかのような発言をしている箇所がある。

何かをわたしに教えるのは、わたしの目やその他の身体感覚、あるいは精神に、わたしの知りたいことがらを差し出す者なのです。⁽¹⁰⁾

この箇所で、教えるのはことがらを差し出す者であると言われている。もしこの意味での教える者の存在が認められるのであれば、人間の教師は教えることができないという主張は成立しないことになるであろう。意図する結論と相容れないこの発言にアウグスティヌスは気づかなかったのであろうか。この疑問に対してアウグスティヌスはどのように答えるのであろうか。このことばに先立つ箇所で次のように言われている。

「わたしの知らない多くのことがらについて、」もし誰かが身ぶりで示してくれるなら、絵を描くなり、あるいはそれに似た何か

を見せてくれるなら、一わたしに教えたのではないとまで今は言わないことにしましょう。もう少し詳しく話すつもりになれば容易に結論できるでしょうけど、一さしあたりまず、ことばによって教えたのではないと主張することにします。⁽¹¹⁾

アウグスティヌスは、対話の中での暫定的な同意と最終的な意図とを区別している。「ことがらを示す場合も教えているのではない」というのは、最終的に意図されている結論である。これに対し、「ことばによって教えるのではない」というのは暫定的な同意である。この暫定的同意において「ことがらを示す」ことが「教える」ことであると言われている。それゆえ「教える」と言う語は二通りの意味で用いられていると考えなければならない。一つの意味では、「ことがらを示すこと」も教えることであると認められる。しかしこの意味での「教える」と言う語の使用はアウグスティヌスにとって暫定的である。「教える」という語を厳密な意味で用いるなら、「ことがらを示す」ことは「教える」ことではない。なぜ、「ことがらを示す」ことは教えることではないのか。アウグスティヌスはその説明を省略すると述べているが、続くことばの中に説明の手がかりを見いだすことができる。次のように言われている。

ことがらそのものを学ぶとき、わたしは他人のことばを信じているのではなく、わたしの目を信じているのだからです。他人のことばを信じたのは注意を向けるため、見るべきものを探すためにすぎません。⁽¹²⁾

学ぶのはことがらを見ることによってであるから、その契機を提供するのが他人のことばであるとしても、ことばは学ぶことによって本質的な役割を果たしていない、とアウグスティヌスは言う。他人のことばを信ずる

ことによってではなく、わたしの目を信ずることによってことがらを学ぶというアウグスティヌスの主張は、学ぶことにおける他人のことばの役割を退けるだけでなく、他人の役割そのものをも退けることになるであろう。わたしの目を信ずることによって学んだということは、自ら見ることによって学んだということに他ならないからである。

IV

われわれが学ぶのは、自らことがらを見ることによってである。このように考えるなら、たしかに、われわれが人間の教師から学ぶという可能性は否定されることになる。しかしながら、同時に、そもそも「教える者」が存在することも否定されてしまうのではなかろうか。そして、内なるキリストから学ぶ可能性も退けられることになるのではないか。

この疑問を解く一つの方法は次のように考えることである。人間の教師によって教えられるのではなく、自ら見ることによって学ぶとされたのは、じつは感覚的な認識の場合に限られる。ところがアウグスティヌスは感覚によらない知性的な認識をも認めている。「教えるのは内なるキリストである」との主張は、この知性的な認識に妥当する。感覚的認識の場合、われわれは自らによって学ぶが、知性的認識の場合には「内なるキリストによって学ぶ」のである。このような解釈は『教師論』の文脈とも適合しているように思われよう。なぜなら、「教えるのは内なるキリストである」という主張が『教師論』の中で最初に現れるのは知性認識について説明した次のことばにおいてだからである。

知性認識することのすべてについては、外に声を発して話す人ではなく、内で精神を統括する真理に相談するのであり、ことばによっては相談するように促されるだけでしょう。相談を受けるものが教えるのであり、これは内なる人に住むと言われるキリ

ストなのです。⁽¹³⁾

次の章では、色など身体を通して感覚することが問題とされ、知性認識されることと対比されているから、ここに言う「知性認識」が感覚認識と区別された意味での知性認識であることは明らかである。感覚認識の場合、人間の教師は本当の意味で教えるのではないとされていた。しかし、そのことは「教師」と呼ばれるような人の役割の全面的な否定を意味していなかった。学び手の注意をことさらに向けるという役割は認められていた。この意味での教師から学ぶことを、アウグスティヌスはここで、「学ぶ」とではなく、「相談する」と表現していると考えられる。「相談する」*consulere* とは、ある問題について、相手の意見を求めることだからである⁽¹⁴⁾。相談を受ける真理は精神を統括していると言われている。「統括する」と訳した *praesidere* は文字通りには「前に座る」という意味の語である。ちょうど教師が生徒の前に座って生徒の質問に答えるように、真理は精神の中で教師の位置にあるとアウグスティヌスは考えているように思われる。ただし、人間の教師は厳密な意味で教え答えることができなかったが、知性認識の場合、まさにこの教える役割が真理に認められている。

この解釈にしたがうなら、感覚認識の場合、人間の教師は本当の意味で教えることができないが、知性認識の場合、内なる真理は本当の意味で教えることができるとアウグスティヌスは考えていることになる。これはアウグスティヌス自身のことばに促された解釈である。このような解釈はしかし、次のような困難を有している。

まず、「人間の教師は教えることができない」との主張が感覚認識にのみ妥当するのであれば、そこから「教えるのは内なるキリストのみである」という主張を導き出すことはできないことになる。「感覚認識されるものについては自ら学ぶ」という主張と、「知性認識されるものについては内なるキリストから学ぶ」という主張とは、互いに独立した主張である

ことになるからである。さらにまた、アウグスティヌスは人間の教師と内なるキリストとの区別を感覚認識と知性認識との区別に対応させてはいないように思われる。知性認識を論じた先の箇所でも「ことばによっては相談するように促されるだけであろう」と言われていた。このことは、アウグスティヌスが、「ことばによって促す」という仕方で教えること、すなわち人間の教師が教えることと、真理に学ぶことが互いに無関係であるとは考えていないことを示している。

むしろ、次のように考えるべきではないか。アウグスティヌスは人間の教師が厳密な意味で、すなわち知を与えるという意味で「教える」ことを否定した。しかし、われわれが教えられ学ぶことができることは否定しない。このことから帰結するのは、われわれは「人間の教師」に教えられるのではなく、自ら学ぶのである、という主張であった。内なる教師を認めることは、自ら学ぶことを否定することにはならない。むしろ、自ら学ぶことの説明として、内なる教師が語られている。「内」と言われるのは、それが人間の教師から学ぶことを外から学ぶことと見なした上で、それと対比しつつ語られているからである。アウグスティヌスにとって、自ら学ぶということと、内なる教師に教えられるということとは、別のことではなく同一の事態である⁽¹⁵⁾。このように解釈するとき始めて、「ことばによっては何も教えられない」という主張から、「教えるのは内なるキリストのみである」という主張を整合的に導き出すことができるようになる。

しかしながら、では、アウグスティヌスが知性認識と感覚認識とを区別し、内なる真理に相談することを知性認識の場合のみに語っていることはどのように説明すればよいのか。アウグスティヌスは感覚認識の内、「見る」場合を説明して、「太陽の光に相談する」と言っている⁽¹⁶⁾。このような表現を見る限り、感覚認識の場合には真理に教えられることなく、学ぶことが可能であると考えているようにも思われる。

この疑問に対して、われわれは次のように答えることができる。確かに

アウグスティヌスは、感覚認識の場合には、内なる真理に学ぶとは言っていない。しかしこのことは感覚を通して学ぶ場合に内なる真理が不必要であるということを意味しない。この問題を考えるためにわれわれは、「感覚認識」を論じた箇所で行われている語 *sentire* の用法をさらに厳密に捉え直す必要がある。*sentire* は *intellegere* と対比的に語られている。「われわれの捉えることはすべて、身体感覚によって捉えるか精神によって捉えるかのいずれかである」と言われている⁽¹⁷⁾。「身体感覚によって」ということと、「精神によって」ということとは、文法的には同じ奪格の形で表現されているが、その用法は同じではない。「身体感覚によって捉える」とは身体感覚を通して捉えるという意味である⁽¹⁸⁾。これに対し、「精神によって捉える」とは「精神において」捉える、ないし「精神が捉える」という意味である。それゆえ、「精神において捉える」ことである *intellegere* は、精神が認識することであると見なしてよいが、「身体感覚を通して捉える」場合には、対象が感覚に捉えられる段階と、感覚を通して精神に捉えられる段階とを区別しなければならない。「太陽の光に相談する」という説明がなされるのは、明らかに、対象が感覚に捉えられる段階である。したがってもしこの段階について *sentire* という語が用いられるなら、それは「感覚認識する」ことではない。この場合の *sentire* は対象が身体感覚に捉えられるということであって、認識することではないからである。学ぶことは、認識において成立する事態であるから、この意味での「感覚すること」が学ぶことと同じでないのは当然である。

それゆえわれわれは次のように言わなければならない。知性認識される「ことがら」の場合、われわれは「ことがら」を真理において見ることにより学ぶ⁽¹⁹⁾。この学ぶという事態に人間の教師は始めから関与していない。これに対し、感覚を通しての認識の場合、学ぶべきことがらを見せるのは人間の教師であるかもしれないが、「ことがら」を見て知を獲得する

のはわれわれ自身であるから、教師から知を与えられたとは言えない。この自ら知を獲得するという事態において、感覚を通しての認識の場合も、何らかの役割が真理に認められている⁽²⁰⁾。

V

われわれに残された問題は二つある。一つは、知性認識されるものの場合、真理はたんに学ばれるべきことであるに過ぎないのかという問題である。もう一つは、感覚を通しての認識の場合、真理はどのような役割を果たしているのかという問題である。この二つの問題は、じつは同一の問題であるように思われる。知性認識の場合も、感覚を通しての認識の場合も、「ことがら」を見ることにより「ことがら」を学ぶというアウグスティヌスの主張は一貫している。知性認識の場合、学ばれるべき「ことがら」とは真理に他ならない。これに対し、感覚を通して認識する場合、感覚されていることと学ばれることは完全に同一であるとは言えないかもしれない。このことはアウグスティヌスも気づいている⁽²¹⁾。しかし、それは感覚される「ことがら」と学ばれる「ことがら」とが完全に同一ではないということであって、学ぶことが「ことがら」を見ることであると考えられていることに変わりはない。われわれが今、問おうとしているのは、アウグスティヌスの言う「学ぶ」ことは、たんに「ことがら」を見るということに過ぎないのかという問題である。

学ぶとは「ことがら」を見ることであり、教えるものがあるとすれば、それは「ことがら」そのものに他ならないという解釈を支持することばがアウグスティヌスに認められることも確かである。とりわけ、「しるしによつては何も教えられない」ことが論じられた箇所では「ことがらによつてことがらを示す」ことが強調されており、「ことがら」と「教える者」との区別は曖昧である⁽²²⁾。しかし、アウグスティヌスの言う真理が、たんに「学ばれることがら」に過ぎないのであれば、見る場合の光になぞら

えられることはなかったであろう。さらにまた、知性認識されることは「真理において見られる」と言われている。「知性認識されることがら」と真理とが密接に関係していることは確かであるが、完全に同一であるとは考えられていない。両者はどのように区別されるのであろうか。このわれわれの疑問に答えることはさし当たり、容易であるように思われる。なぜなら、「真理」という呼び名が示しているように、真理は認識されるものであるだけでなく、認識が真であることの根拠でもあると考えられるからである。問題はしかし、真理は認識が真であることのいかなる意味での根拠なのか、という点にある。

現に感覚していることではなく、かつて感覚したことについて問われるときは、「ことがら」そのものではなく、「ことがら」から刻まれ記憶に委ねられた心象を語るのである。このとき、見られているものが偽であるのにどうして真を語ることになるのか、われわれがそれを見ているとか感覚しているとかではなく、見たとか感覚したと語るからでないとすれば、わたしはその理由が分からない。⁽²³⁾

かつて感覚したことがあるが現在は感覚していないものについて語るとき、見られているものが「偽 falsa」であると言われていることにまず注目しよう。偽であると言われているのは、見られているものが「ことがら」そのものではなく、記憶の内の心象という「ことがらの像」だからである。この意味での「真偽」がプラトニズムの伝統に忠実な用語法であることはただちに気づかれるであろう。ところがアウグスティヌスはさらに続けて、偽を見ているときにも真を語るができる、と言う。「ことがらを感じている」とではなく、「ことがらを感じた」と語るなら、真を語ることになるというのである。「このような心象を以前に感覚された

ことがらの一種の証拠として、記憶の奥に持っているものであり、精神によってこれを眺めながら語るときには、良き意識によってわたしたちは嘘をつかないのです」と言われている⁽²⁴⁾。アウグスティヌスは、われわれがことばを話すとき、何かを「眺めながら *contemplantes*」話していると考え、「眺めながら」と表現されているのが、ことばを語るときわれわれの持っている知であることは明らかであろう。すでにわれわれが見たように、アウグスティヌスはことばの表示している「ことがら」についての知は、ことばを聞くことによってではなく、「ことがら」を見ることによって獲得され则认为しているからである。記憶の内にある心象は、知についてのこのような理解が要請した、ある意味での「ことがら」である。ここでアウグスティヌスは「ことがら」を見ることによって一度獲得された知が、以後はそのままの形でわれわれの知として持続するとは考えていないことに注意しよう。知はことばが語られるそのつど、何かを見ることによって成立している。ことばを語るそのとき、「現に見ている」という仕方で、われわれは何かを知っているとアウグスティヌスは考えている⁽²⁵⁾。感覚しているものについて語るときには感覚されているものが現に見られているものであり、感覚していないものについて語るときには記憶されている心象が現に見られているものである。アウグスティヌスは「心象を語る」という言い方をしているが、これはもちろん「心象について語る」ことではない。過去に感覚した「ことがら」について、それを過去に感覚したものとして語ることが、「心象を語る」と表現されているのである。現に知っていることが何であるか、「ことがらそのもの」であるか、「ことがらの像」であるかを知ることによって、「偽」を見ているときも真を語ることができる、と言っているのである。このとき、われわれはもちろん偽を語ることもできるであろう。またもし自分が現に何を見ているか知らなければ、自分の語っていることが真であるか偽であるかを知らないことになる。

VI

アウグスティヌスは二通りの意味で「真偽」を語っている。一つの意味では、身体を通して感覚されていること、「ことがらそのもの」が真であると言われる。この意味において、ことがらから魂に刻まれた心象は偽である。もし真理が、この意味での真の根拠であるなら、真理とは真を知っていること、すなわち「ことがらそのもの」を知っていることをわれわれに確信させるものとして真の根拠であることになる。しかし、もう一つの意味では、何であれ「現に見ていること」を語るとき、われわれのことは真であると言われる。真を語るができるために必要な認識は、「現に見ていること」の第一の意味での真偽を識別することであるから、ここで求められる真理は真偽を識別する根拠としての真理であることになる。「真理においてみる」と言うとき、アウグスティヌスはいずれの意味で真理を語っているのだろうか。『教師論』の中で、最初に「真理に相談する」と言われたとき、アウグスティヌスが考えていたのは前者の意味であると思われる。感覚を通しての認識について「色については光に、身体を通して感覚するその他のものについてはこの世の元素とか感覚される物体、またこのようなことを知るために精神が仲立ちとして用いる感覚そのものに、……相談する」と言われているからである⁽²⁶⁾。ここでは「ことがら」そのものからわれわれの精神にいたるまでの「認識の経路」が語られている。このような「経路」を確認することは、われわれの見ていることが「ことがらそのもの」であって、「ことがらの像」ではないと確認することに他ならない。ところが対話の終わりの箇所では、教師のことは聞く生徒について、次のように言われている。

そのとき、生徒と呼ばれる人たちは、真が語られたか否かを、
自分の中で考える。もちろん、かの内なる真理を自分の力の及ぶ

範囲で見つめながら。⁽²⁷⁾

ここで真理は「真が語られているか否か」を考える根拠とされている。すなわち、真理はたんに「真であることを確信させる根拠」ではなく「真偽の判断を可能とする根拠」であると考えられている。真理概念のこのような変化は、知の概念の変化に呼応している。なぜなら、もし真理が「真であることを確信させる根拠」であるとするなら、真であることを確信しているときにのみ、「知っている」ことを認めることになる。しかし、真理を「真偽の判断を可能とする根拠」であると考えるときには、真偽いずれを認識している場合でも、真偽の判断がなされているなら、「知っている」と認められるからである⁽²⁸⁾。対話の中で真理概念がこのように変化した理由について、われわれはさしあたり次のことを指摘できるであろう。アウグスティヌスは、「真理に相談する」とか「真理において見る」と言うとき、真であることの最終的な確認がなされるとは考えていない。「真理に相談する」精神がそれ自身の弱さにより、間違ふ可能性を強調している⁽²⁹⁾。真であると確信することが、このように誤る可能性を排除しない確信であるとすれば、その確信は「判断」とそれほどかけ離れたものではないからである。

注

- (1) *Retract.* I,2. scripsi librum cuius est titulus, 'de Magistro', in quo disputatur et quaeritur, et invenitur, magistrum non esse, qui docet hominem scientiam, nisi deum, secundum illud etiam quod in evangelio scriptum est: 'Vnus est magister uester Christus.'
- (2) *De mag.* 14,46. Nunc enim ne plus eis quam oportet tribueremus admonui, ut iam non crederemus tantum, sed etiam intellegere inciperemus, quam uere scriptum est auctoritate diuina, ne nobis quemquam magistrum dicamus in terris, quod unus omnium magister in caelis sit.

- (3) *De mag.* 11, 38.
- (4) Madec の提案に従う。ただし、節の配分は完全に同じではない。Madec, G. *Oeuvres de saint Augustin* 6, Paris, 1976, Introduction, p. 20.
- (5) 厳密に言えば 1「しるしなしには何も教えられない」ことと 2「しるしによっては何も教えられない」こととは矛盾しない。なぜなら、この二つの命題において「教える」ことは完全に同義ではないからである。しかし、1 から 2 へ対話の主題が移行する箇所で、アウグスティヌスは 2 の主張が 1 の同意を覆すものであるという主旨の発言をしている。*De mag.* 10, 32.
- (6) 『教師論』におけるアウグスティヌス自身の意図は、人間の教師一般について論ずることではなかったと考えられる。『教師論』の最後で、人間を通し、外からしるしによって神に促される、と言われているからである。*De mag.* 14,46. cf. *De lib. arb.* II, 14,38. ueritatis et sapientiae pulchritudo foris admonet, intus docet 'admonet', 'docet' いずれの主語も同じである。
- (7) *De mag.* 1,2.
- (8) *De mag.* 10,33. Quid? quod si diligentius consideremus, fortasse nihil inuenies, quod per sua signa discatur. Cum enim mihi signum datur, si nescientem me inuenit, cuius rei signum sit, docere me nihil potest, si uero scientem, quid disco per signum? Non enim mihi rem, quam significat, ostendit uerbum,
- (9) *De mag.* 2,3. signum nisi aliquid significet, potest esse signum.
- (10) *De mag.* 11,36. Is me autem aliquid docet, qui uel oculis uel ulli corporis sensui uel ipsi etiam menti praebet ea, quae cognoscere uolo.
- (11) *De mag.* 10,35. Quas mihi si gestu quispiam significauerit aut pinxerit aut aliquid, cui similes sunt, ostenderit, ne dicam non me docuerit, quod facile obtinerem, si paulo amplius loqui uellem, sed id quod proximum est, non uerbis docuerit.
- (12) *De mag.* 10,35. Non enim, cum rem ipsam didici, uerbis alienis credidi, sed oculis meis; illis tamen fortasse ut adtenderem credidi, id est ut aspectu quaererem, quid uiderem.
- (13) *De mag.* 11,38. De uniuersis autem, quae intelligimus, non loquentem, qui personat foris, sed intus ipsi menti praesidentem consulimus ueritatem, uerbis fortasse ut consulamus admoniti. Ille autem, qui consulitur, docet, qui in interiore homine habitare dictus est Christus,
- (14) *Oxford Latin Dictionary*, ed. by P.G.W. Glare によれば, consulere の

- もっとも基本的な意味は、To apply to (a person) for advice or information である。
- (15) いわゆる想起説にかわって、内なる真理に学ぶという考え方が現れたことも、このことを裏付ける。
- (16) *De mag.* 12,39. Quod si et de coloribus lucem consulimus
- (17) *De mag.* 12,39. omnia quae percipimus, aut sensu corporis aut mente percipimus.
- (18) *De mag.* 12,39. Quod si et de coloribus lucem et de ceteris quae *per corpus sentimus*, elementa huius mundi eademque corpora quae sentimus *sensusque ipsos, quibus tamquam interpretibus ad talia noscenda mens utitur* consulimus 精神が「認識する」とときには、感覚も相談されるものとされていることに注意しなければならない。
- (19) *De mag.* 12,40. Cum uero de his agitur, quae mente conspiciamus, id est intellectu atque ratione, ea quidem loquimur, *quae praesentia contuemur in illa interiore luce ueritatis*, qua ipse, qui dicitur homo interior, illustratur et fruitur;
- (20) 感覚されることと知性認識されることの関係について、『教師論』の翌年の390年に書かれたと推定される『書簡』に次のような記述がある。 *Ep.* 13,4. Hoc si dices, ueniat in mentem illud, quod intellegere appellamus, duobus modis in nobis fieri: aut ipsa per se mente atque ratione intrinsecus, ut cum intellegimus esse ipsum intellectum; aut admonitione a sensibus, ut id quod iam dictum est, cum intellegimus esse corpus. In quibus duobus generibus illud primum per nos, id est de eo, quod apud nos est, deum consulendo; hoc autem secundum de eo, *quod a corpore sensuque nuntiatur, nihilo minus deum consulendo intellegimus.*
- (21) 「歩くとは何か」と問われ、数歩歩いて見せたとして、問い手は「数歩歩くこと」だけが歩くことであると思うかもしれない、という危惧に対し、アウグスティヌスは、問い手が十分理解力のある人ならそのおそれはないとだけ答えている。 *De mag.* 10,32.
- (22) *De mag.* 10,32. Nam ut hominum omittam innumerabilia spectacula in omnibus theatris sine signo ipsis rebus exhibentium solem certe istum lucemque haec omnia perfundentem atque uestientem, lunam et cetera sidera, terras et maria quaeque in his innumerabiliter gignuntur, nonne *per se ipsa* exhibet atque ostendit deus et natura cernentibus? ‘per se ipsa’ という表現に注目しよう。この文の主語は deus et natura で

ある。しかし *per se ipsa* という再帰表現は中性複数形であるから、その受けているのは、この文の主語ではなく、目的語の「太陽やその光……」であると考えなければならない。すなわち、この文を語るアウグスティヌスの意識において、「示す」*exhibet atque ostendit* の主語である「神と自然」と目的語である「太陽やその光……」とは類同化していると考えられる。

- (23) *De mag.* 12,39. Cum uero non his quae coram sentimus, sed de his quae aliquando sensimus, quaeritur, non iam res ipsas, sed imagines ab eis impressas memoriaeque mandatas loquimur; tum omnino quomodo uera dicamus, cum falsa intueamur, ignoro, nisi quia, non nos ea uidere ac sentire, sed uidisse ac sensisse narramus.
- (24) *De mag.* 12,39. Ita illas imagines in memoriae penetralibus rerum ante sensarum quaedam documenta gestamus, quae animo contemplantes bona conscientia non mentimur, cum loquimur. Rist はこの箇所を、過去についての「知」は、その直接の対象を有していないがゆえに、もはや知ではなく「信」とであると解釈している。しかしこのアウグスティヌスの論は、Rist も認めているように、過去の対象がもはや存在していないがゆえに、知の対象とはなりえないという方向には展開されていない。記憶されたことを「眺めながら」*contemplantes* というアウグスティヌスが、ここで「知」を語っていることは明白である。Rist, J. M. *Augustine*, Cambridge, 1994, p. 73
- (25) 「ことばによっては何も教えられない」というアウグスティヌスを弁護して、Burnyeat が導入する *first-hand knowledge* という概念は、アウグスティヌスが「そのつど見る」という形で知を考えている以上、アウグスティヌスには適合しない。同一のまま持続する知を認めないとき *second-hand knowledge* と区別できないからである。もっとも、われわれはことばの表示する「ことがら」を知っているか知っていないかであると論じられるときには、知のあり方そのものはまだ分析されていないから、暫定的な区別としては成り立つかもしれない。Burnyeat, M. F. *Wittgenstein and Augustine De Magistro*, PAS, 1987, Suppl. pp. 1-24. 知性認識の場合に「われわれは、現前しているものを見ている」*quae praesentia contuemur* と言われている。*De mag.* 12,40. この *praesentia* は、アウグスティヌスがいわゆる「想起説」から「照明説」に考えを変えたとき、中心にあった概念である。
- (26) *De mag.* 12,39. Quod si et de coloribus lucem et de ceteris, quae per corpus sentimus, elementa huius mundi eademque corpora quae senti-

mus sensusque ipsos, quibus tamquam interpretibus ad talia noscenda mens utitur, consulimus

- (27) *De mag.* 14,45. illi qui discipuli uocantur, utrum uera dicta sint, apud semetipsos considerant, interiorem scilicet illam Veritatem pro uiribus intuentes.
- (28) 問われて最初間違った答えをしたが、やがてことがらの全体を見ることができるようになり、正しく答える場合について次のように言われている。 *De mag.* 12,40. Tum uero totum illud quod negaueras fatereris, cum haec, ex quibus constat, *clara et certa esse cognosceres*, omnia scilicet quae loquimur, aut ignorare auditorem utrum uera sint, aut *falsa esse non ignorare*, aut scire uera esse. 懷疑主義への共感を通してプラトニズムの伝統に触れたアウグスティヌスは‘falsa esse scire’と言うことを避けているが、ここでの‘non ignorare’は‘scire’とほぼ等しい。
- (29) *De mag.* 11,38. Quam [sc. incommutabilis Dei atque sempiterna sapientia] quidem omnis rationalis anima consulit, sed tantum cuique panditur, *quantum capere propter propriam siue malam siue bonam uoluntatem potest.* 14,45. interiorem illam Veritatem *pro uiribus* intuentes.